

説話の種本『酔翁談録』の完訳版

甲斐 雄一

Alister D. Inglis 訳
The Drunken Man's Talk:
Tales from Medieval China

23.4x15.7x2.3cm
238頁
University of
Washington Press
[US\$50.00]

中国宋元代における講唱、語り物の文芸について考えようとする際、『緑窓新話』と並んで最も重要な資料となるのが『酔翁談録』である。羅燁という人物の編集による二〇巻本が今に伝えられているが、この現存本は伊達家観瀾閣所蔵の二冊本、いわゆる域外漢籍であり、発見されてすぐに影印が刊行されている(文求堂、一九四〇年)。その甲集巻二「小説開闢」は、当時の(語り物の一ジャンルとしての)「小説」を「靈怪、煙粉、伝奇、公案、朴刀、桿棒、神仙、妖術」の八つに分類し、かつそれぞれの代表的な演目を列挙している。そこには「人虎伝」や「鶯鶯伝」のような唐代伝奇や、「青面獣」、「花和尚」、「武行者」のように『水滸伝』に連なる故事が語られていたことが示されており、発見以来、日中の学者から注視され続けてきた資料である。

訳者のアリストター・イングリス氏は、アメリカ・ボストンのシモンズ大学教授を務め、その著作には、洪邁『夷堅志』に関する『Hong Mai's Record of the Listener and Its Song Dynasty Context』(State University of New York Press 2007)や、『夷堅志』の選訳『Record of the Listener: Selections of Chinese Supernatural Stories』(Long River Press 2012)があり、日本語に訳されたものに「洪邁の『夷堅志』におけるナラトロジー的あいまい性」(吉田真弓訳、伊原弘・静永健編『南宋の隠れたベストセラー『夷堅志』の世界』アジア遊学一八一、勉誠出版、二〇一五年)がある。『夷堅志』といえど、『酔翁談録』にも説話人必読の書として挙げられており(『夷堅志』無有不覧)、イングリス氏の関心が南宋から元にかけて語られた物語にあることが窺える。

「The Drunken Man's Talk: Tales from Medieval China」は、『酔翁談録』の英語による全訳である。ここで全訳というのは、もちろん『酔翁談録』に収める作品全てを翻訳しているということであるが、それを遂行するために、訳者がそれぞれの作品を彩る韻文、すなわち詩詞を訳出していることを強調したい。周知の通り、詩詞の本文はしばしば省略や語順の転倒を含み、また用いられる典故や先行作にも目を配らねばならず、多大な労力を伴う作業である。また洋の東西を飛び越えた翻訳であるため、正確さとともにその語彙のイメージを訳出する工夫がこらされている。例えば、詩句の中の「東君」「東帝」という語彙は、翻訳では「Persephone」春をもたらす女神であるペルセフォネとなっており、注釈において原文では「Lord of the East」の意であることを断っている。まさしく訳者は、細心の注意を払って古代漢語から現代英語への移植作業を行っているのである。

全訳であることに関連して、本書には一篇の付録がある。「蘇少卿」と題するその作品は、『永樂大典』巻二四〇五に『酔翁談録』から引用したと記される佚文である。これは現存本が『酔翁談録』本来の姿を留めていないとされる根拠の一つであるが、本書はこの作品も翻訳の対象として巻末に収めている。ところで、我々日本人が中国の古典作品を読むときに、本

文の英訳を参照することは残念ながら多くはないであろう。しかし、本書には豊富な注釈が付されており、個々の作品読解の一助となるばかりか、『酔翁談録』が編集刊行される成立過程についても示唆を与えてくれる。

例えば、『酔翁談録』観瀾閣旧蔵本には、各巻の巻頭に「舌耕叙引」、「私情公案」、「煙粉歎合」、「婦人題詠」のような標題が墨圈隠刻で示されている。丙集巻一の標題は「宝窓妙語」となっており、訳者はこれを「HUMOROUS TALES FROM A PRECIOUS WINDOW」と訳した上で、原本の「宝窓」が用例の見られない語彙であること、この巻に収められる故事が女性にまつわるものであることから「緑窓」を「宝窓」と誤ったのではないかと、との推測を注釈で示している。この注釈一つとっても、『酔翁談録』現存本が決して信頼できるテキストではないこと、また訳者がそれを十分了解した上で翻訳していることがわかるだろう。

中国古典における物語は、モチーフやプロット等その骨子を同じくしながら、時代や地域を越えて様々なバリエーションが保存されている。本書の注釈には、『緑窓新話』や『太平広記』等に収められる類似の物語が指摘されている。こうした指摘は、例えば先行する『酔翁談録』の点校本（中国文学参考資料小叢書第一輯の九、古典文学出版社、一九五七年）に既に見えるも

のであるが、訳者はそこから更に踏み込んだ考察を加えている。例えば、『醉翁談録』庚集卷一「刁氏夫人賢德」は「刁氏夫人、伊川先生之母也」と始まっていることからわかるように、「二程」の一人、北宋の程頤による「上谷郡君家伝」にもとづくものであること、『醉翁談録』点校本が双行注で両者の本文異同を示すとおりである。訳者はこれを踏まえた上で、程頤「上谷郡君家伝」では母親の姓が「侯氏」であることを注記し、編者にとって「侯」字が避諱の対象であった可能性を指摘している。また、「上谷郡君家伝」では程頤の父を「先公」と表記するのを「夫君」と改めた表現があることから、羅燁が直接「上谷郡君家伝」に拠ったであろうことを推断している。

先に標題の校訂について触れたが、乙集卷一と己集卷一の標題は同じ「煙粉歎合」となっており、唯一重複している。訳者は「煙粉歎合」を「ROMANTIC UNION」と訳し、己集卷一の注釈で、この巻の分量が比較的少ないことを指摘し、原テキストでも同じ標題で別の巻にあったとは考えにくく、乙集卷一と己集卷一はもとひとつだったものがテキストの乱れによって別個に再編集されたものであるとの見解を示している。このように、本書の注釈は、物語の内容に関わる説明のみならず、『醉翁談録』の編集・成立の過程にも言及しているのである。

以上、評者の語学力の限界から、木を見て森を見ないよう

な評論になってしまったが、最後に訳者の『醉翁談録』翻訳の意図するところ、その関心について触れておきたい。

序文において、訳者は『醉翁談録』が収める宋元代の語り物文芸を、それに先立つものとは後に続くものに関連づけて論じている。先立つものとは、「李娃伝」が『醉翁談録』にも取られている（癸集卷二「李亞仙不負鄭元和」唐代傳奇であり、後に続くものとは明清の白話小説に代表される通俗文学である。ここには、二つの柱となる考え方が背景にある。一つは、Stephen Owen が提起した「culture of romance」という枠組であり、もう一つは、しばしば一括りにされる唐宋と明清の間を埋めてその歴史的移行を考えようとする「Song-Yuan-Ming Transition」という枠組である。訳者は、妓女のような女性の再婚、駆け落ち、婚前交渉といった自由な振る舞いは朱子学の規範によって宋代以降抑圧されたが、『醉翁談録』のような語り物文芸はその保守的大勢に立ち向かう形で存在したとしている。とするならば、「Song-Yuan-Ming Transition」を経た後、訳者が例示する馮夢龍『情史』等に表示される明清期の「culture of romance」はどのように展開していったのか。訳者の今後の研究が俟たれるところである。我々も、英語圏の研究成果に今まで以上に注目し、また交流する必要があるであろう。

（かい・ゆういち 日本学術振興会特別研究員）